徐民公統

上

源氏目録

一 桐つか せんさ花りえし

二 ちくさ木 并 うつせ見 并 タクか

三 若むらかさ 并 しゑつし花

四 もみちの賀

五 花乃えん

六 わかひ

七 かり花

八 花ちるかせ

九 しき月

十 わかし

十一 みとぼくし 并 せき屋 并 ましきふ

十二 恋あるせ

十三 松ノ鶴

十四 うしと雲

一 桐蠹

桐ぼかせいふ書れ事大内のうちにゐれ殿の名
なりしけいしやさ門ハ桐つかの事なり此桐ぼか
小光ゑんしのれ母さふ世語ふ扨しそきるとつか
のかしぬと門ゑれ此うぬ一の人なんとのれむ世光
母くハなし父ハ大納言にて失ひし人の子なれ
れくこち名たりさやくわりくれ家ぼうへ内へ
家り語ひしそうしれ門ぶとれ外にさ死ぬ世語へ
もかくへの女御かしぬみやもさしろそ〇三語ふ
ぬる程に此うしぬのれ腹にワうやひとこしろいそ
きさせ語ふおなし程それ事下らしのかしぬさ

ちまて屋とりしをわさ夕みや御うゐ小付くも人
のんとのこうこうし恨をおふ御りりやるをんけし交
三よなり給ふ爰のころ御母りうゐかくれ給ふ屋下
ひかさりなれハ大内のうちゆく人のかくれをふる
なれるれハ御いと御下しく御せへ出させ給ふせめて
の御ふさしれせ門なれハてく御下のせんしと給ハ
て出給ふ此車いみしさくハ志まくの事なれを
おかろを此人無ゆるされさましとあまりなる御
ふさしなりその折のことを

あつしく なやましきいさもそまく御ゝ苦しき事
やこきれさかうまれハおくきまて御ゝ三位のうゐ
ゐのちよくし
御ふさしなり
御ゝ大内と出給ひしおり御門御なとりおしま
せ給ひてさ御くのことのくまへともそまくおし
て物も申屋しさりしう奇なり

かさゐをせくゆるくみちのかなし給ふ
いう御御しさハいのちなりなり
是ハかうゐのかさりの奇そうし御ふのまくなしハ
きゆさのくしゐ母もなさましこれ御しかしさり
志かせかくへのそのことも又これそしまをおかして
うせくのちさうの取へらくしをたてゝ三位の
くしゐををくしせ給ふかさりの御御うひあれなり

かくて秋母もなりぬ、かのうせ母しがりぬの母を
おなしく内にさふらせ給しう若宮作いこのかと
なれハ此まさまくまろりてさせにしこ給ふ風
のりさまちて抱おもれなるなくれに内にあるかの
此さしへゆけいのこやう姫といふ女房を作けりいつ
かもせのふなる紀人のあとなれハふるさせ母も作にし
そのかとのおとしもに

屋屋むくら　虫の○志けさ　まくむし
雲の上人（大内に交つる屋人）　みやさのく小萩　淺ちふの屋
露をきそふる

まれらハうゐのさせ母くの事なれハなる紀人なる
屋せなしいふ事あらハつけさせ給ふへし此門にあ
の作ふこにかうゐの母のもとへ若こやの作ことをこ
給ひ以作哥

みやきのく露ふきむしふ風のをとに
こゝ紀うもとをおりひよう屋れ

こゝ見給ひしなる柳この作つりひ鳴りくるにを
くり抱ふかうゐの跡しをくれなるてうとしく抱
を丸いこし此ひそりしなるかうゐの母わら紀
風させしけのうれしるこゝ紀うへそ志つ
ふれさをくる抱といふるもあらもなる紀人なるとつく
屋しかのうゐの人にそ○まれくうせし人なれ

はかりしめやまくまゝ門をくはゐに志のひくに
ゑり給ひて此子一人出さゝふまゝいせいなんせ申
せしハ此事かなもゝ桐つかの此門とかんしの父
此門をかし事此事ゝ見えかゝ主ゝ心ゝまゝ
志ませ桐つかの此門とかりたゝへそてまつる
みかとハ思ふんさの此事せ見えそもりよくん返

二　箒木

此事よあすし秋の物ゝりといふ事ハかんしの君
此物いこにくはゝこそ久ゝ大内のとのゐところに
おもしゐとはつれくのかくさめまやこそこゝろとの
中物とせてしハ源氏の此こ志こしとわふひの上凡

はあふかなもかゝ君とむすのうゝとす式部といひ
し天上人ゑりてくゐかれもきゝ物ともなれも物
ゝゐもしはゐくに人の志れをつちよしおしを
さゝめきこれをあすよの志れはゝめといふその時
のことも

二のまちつ　文ともせのむすめ　とし志さゝ物ゝり
ひるゐもくせ　なそしこ　としの中ゐの物ゝり
これゝハ物ゝり世ゝ給えへし　こゝ付へし
てをおりて　こゝ此屋と　むすのうゝ物ゝり
此事よとこしの中物の物ゝりに出ゝの内侍
のうゝ此事をなそしこせかゝり出しそもり安陸

夕くれの上そらし物くるほしきとしゐいふ事
あしたはまつよるごとにかへし拠このうたへは月也
きぬぎぬなきてかへる也へは世の事也へかなしきへのうと
むかしの上らうは四季おりおりにかへていふ事もあり
拠りのわこわきうはさかへ出させ給はんとするよ
ひさかたのあまのうつしはの女人のいよの命にてい
かりへなくしてうつへあはれの歌のあらしき給ひ
ゐのしこまるはなる也へ世法へ付へし
座りみ川　さもの紀　よもしゆかけるを
いよあはれけるの歌の座りの此世んをいふことなりしる
此はよんはなしてうつへありき梅あるしのいよの
もけは君のなりし名をゆるふゆくのおもくるおんし
其のひて女ともの様々る西へなをしてさらし其々
由へは様々さる心せちくてつはらへとえてつひ
名残をあまる袖し其のいへてとるくののよそん南
なりひかけをなりひて
久すあふぬ世座りなつるあれしさに
あるものなつそきゆるもろこさて
とゝみし程へまことそはや世よくきてさはつひ久れ
此へ命しおなしも花ひわつやとみとる人あるくいりの上をを
なかさら流しとなる人き人母はわし様ともおやしる
夕てえあるを人もあられはなりひのからふかくて

ゐる事を語称をひろしてよみしなりさてこゝくい
ひてかのうふあふそのまゝ母くしきりて立(たち)なま
れしかともはゐふみもわひそもてまろしまいよく
なんしハ御心はくしふおりひ給ひなるとやまゐ乃
ゝ後てもひとれさせ給ひくいよのまけ志てのち
あまふかなるまゝりしとむ人給ひく二条院(てうのゐん)のひし
のそいよまをませられ志ふのまけ歌ハなりかはひて
里なりとの京(いまくこく)桃川なりくてかへふ御くなし此物
をいりふなてしことあろしをかゝり出まゝ事とし乃
中(ちうゆ)の物ゝりかなるまゝのうゝか物ゝり母はひかふ
女房(ゐうしつ)のりとへひうとをそもちの屋しなる人かしいなるを

も志くを大内(うち)より出なるに此ゝ人人車(くるま)にのりてゆ
くやひふとゝ御くそやおりふに我ゆく所なり夜(あさ)まし
せおりふにこゝ筆(ふゑ)をふさてそくの色ハ内
よりまひあんをひくこの屋とふさくりみちなき
ありなるなり

此と此称も月も元なりぬ屋となりし
御まゝ此人をひきやとめ給ひ
とよみそりそれより此女のりとへゆりまとされハ
まきたるめらんをんなふんをとゝ色々へ也
このさんそちよりしそりしかりみとしの平(たう)
物(ゆ)のなてしことかゝり給ひし母(ふく出)夕かのうへなり

志のひくにかゝるひ給ひていとあさかるさゝらしに
おさあさへさへ出さてこのよ一とをおもはさゝらしに
うるかりしき小のものゝこゝろをなそ給ひしことといふとき
きくかとうかる家よくれてゐるうある時とうの
君おもしみるにあらしく恨しかんとせしを
かゝるさくさて姫さ見のかことを
山の門のかゝ紀か あるかとも おりくに
あれはかけよるてしとの露
とゝ見くそれくち程なくゆさかくれらりと
かゝり出してもかゝるこくさゝそもり此人そうし
夕かの夢よそんしにあひてなかふしの見

見く志にきかてしこハ五つ十七の夢
り見てみもり又とうしさふ掛かうりはるせの
むとめのもとへかよひしにある時ゆさそれハ掛
ましにいひけしてあるもいかにとくへハあく祿つ
のさう屋くつくしてくさきにあるくあハもや
ゆり六月のうしひるといふ掛しや此かあさまりしを
くさしおよとこそむかひねくしめとおもひてか
為りしなり志さふる奇り
ゆるかのうるまひしるゝ紀々くれり
ひる雨をくせやいふうあやなる
とゝめり女の母しに

なるへ下つもとく人もとくなるおりこのこきこと
はまさせ給く一車(くるま)にめしてかのなるへ口うりなまふ
みな人は此おされき人なるわきさくるとおりひされは
なんしは此車(くるま)の内にかくまてく人しけまるとてのこ
こきこと志るへはそのそき給ふしと毋はまふ心
もとめのみ此はるといふそこうらてゐるはその
はとのことも　碁(ミラ)　かひまのみ
ゆふ屋ミ　為たとくしき程一くなり
こりしひ(火おのうちまり)こきかん　十とと
此ならと　三十ミそ　四十しそ
こう

あれは此おりのことにはくゐしみしのきこ碁
うちはてくかそへそるんなりさて碁(ご)うちは
てり給ともよふもと此給(ゑん)して志つまる程は
志のひいせ給ふまかの女はとけく祢られ祢を
いせとくきて志りてもへりくまぬあれは此
なしとこころに祢はるむもめれくることおほし
めしそれはあれをいのあしと給くくれぬせこの
もゐけのことくさぬるり給しそれ心なるを
このむもめにあひ給ひておとう雨しかるへかれはわま
そもひのうてくなしせもあれゆへそと人のおも
しんとおかしてかくらせ給ひしうともしこ

よりも此心さしわしたまはハ又ともわひ給ふもそ
の後一よの情(なさけ)りし物(のき)その花さとしむもハのれ
所(うた)わり
かのうゑものさまれ花さとしむもそ十は
鶏のうとをかゝわてうけまし
此返し
はのめるを風りつけても志ゝ花さの
なるはハ鶏ほ人へ見まなり
此返事に志ゝ花さとしもんなりし程にこの
人とは志ゝ花さとも物(のき)その花さともなく下
心なしぬ事ゆゑ一枚のことにも此をしへ

花なし事なるへし枚此心さしれ人ぬさを給ふ
ましさぬとゝりてかゝり給ふこのことも
こまとく鳴(ゑ)るさぬ　此書の名なり　人に志む
枚そのわしこの此ふこあり
うつせこの方とかへてなりこまれまこ
なる紙人うしのなつうしさう那
さてこそ寛蝶(うつせミ)とは名(な)つけをまてあれらハみな
夜(まつ)の事なるまうつせこ母はいう母も人なるへ一
枚のちさまをなせひきあるせて此くへ
ゆふかなたこさくの
此書(まき)多かといふ事ハ六条(てう)のみや(こや)をところせ

やさしハせんもうとくとうふくゝれ給ひ
しみやしとこゝろ六条わたりにいと屋ん事なくて
おもしゐしさまれそ桐つかの江門の江中に
ておりしましきとうくうてかくれ給ひしかは
いせわへなくおかしゆして姫宮のおもしゐしをも
うちのみこれとくおほしめしかはらしみやしとおへ
かんし思ひつゝ来り給ふおかけるきことくよの
人もおもひそしくまつる事なくかよひかふ道
又楽なる所りゆふかの所さうゐまるこゝ家
あり内に女房とをあまたこうしありくとめる
しきかけ見えてかりあれそもくさくの君ゝ

とうの中将のかたらし此姫君のもとのかくれてゐる
家ところなるまあるゆふくれにまいの六条あるゐ
のあのひわりきに車をそてゝ夕かのもれの
白く咲くわるをなかの花そと
見よをさくくまらせしやてもれをおくゝ白さ
あふさのいそもくかしもしきをそもくまつるそ
のかせのことも

白さあふさ　あしそるといふかうもしきさす
そしめ　中将とこゝあやまり　たそうれ明
ひかり　小口忍
きりしけそもつ抱　屋りとくち

うちまゐく　　もさうきこれにはなうかは
扨なんしの臣哥　　はくへし

よりそこそうまつりとも見めたそうれ
かのくに見はる花のゆふかか

いう母もなるかに人をもらへりるさはあるましさそこそ
なるかの妻とはいふ女房とはゆふかのうへといふか
をてなんしのめれとのめれこうにおかせはなく
よくく楽門させくとさくおもしまし　ぬ字
おれとうの中揚のかうりしなそしこの母にやと
わやしくおりひなりしわさうしもかよひ給ふ頼に
秋母もなりぬ八月十五日わろさうなれしの

なんをいさなひなふさ秋はかの小家にとくまり
給ふりしとなりのいふにめさましてさく志願
をかくもしいさき物かりなとしるそのかとれ
こしも

みさけさうし　なしらいそうし　志ひくころ物　女房のさうしの
かうしものとと　となり　ぬうはく

おれらなるかの小家にはきさせ給ふ色しさそも
みさきさうしにこそ志そんとおうむとさうせ給
ひくちやうせいあのもの　とうけしえく　とかしん
し地さりもひさうへてこころくの世と称ひて　女十
六とく七子万楽とおかしめしなりや

うちそくりとこかふみちと志るへうく
あんうをとふり紀ちこさりとなよふか
お紀なり川をしちさうしを語ひしふ十六日のよか
かうし志に語ひしそ液としにわもれな液枇十文
月のあり川さひとう川車（くつま）母くなふかしのみんへ
いさな花多ふ志のてめ也かのうなるよ露（つゆ）のひかり
やいうくゆくの語へも
此ふ露まひもとく花いふかこの
為しわとにえこしえなよこしそるれ
返し
ひかむしわりとみて夕つかのうしも露い

みちそうれ内のそうしめなりぬり
なとくいひうけして十六月一日八日れなふかしの院（ゐん）
のわまえなるうよたさうしかうひてくし語ふを
のこしを
志るくめいさまめしめつき
志りめ
液西のいより
たかしくる雨
わまえなる庵と
氷くさにむりて池（いけ）
液りうち（とのなれいまん つるうち）
なかしのあんの世い
さりのかしく家かへのすくるを（みきてをそろ）なとしいわれも
いひ庵つくなし
きんしは太刀（たち）をぬきうく我かふ抱のわしをとりし

ひしとかなしなりあれしもんえくつをさせかね
なし扨いかにせんとくあれ三門とめして、おかせ
あれせてさよみ門にあまた三門かたかへのかたかへ
むなしさかしとらやしてあるかさうしとうい
むしろにとしつゝきて出せもかゝこかまた出しく
めもあやなりこの車にかのほかへしうこんとい
ひし女房のりそひてゆくんのうちなりひあるも
かれしされもさよきうなといふことも人はき
そもりとも雛をへうしまさてなんしあまるわ
へかくあさましくおほしてあれこうとめしく
志く清水まそおもしてかさうしを泊んし

ていとくなりひ雨さり給ひしかうちかし給ひし
雨こうりしたまハまりくれな井のほそのまゝさる
ひし面部いかしんよかりまもへきと志門こ
へせ給ひくかしくせ給ひて屋しく泊んまいかし
もさ雨くにおもしてよれえけ母く
秋のもの思ひそとこそり給ひし雨ことにと
もりなりかれ右丘をはいこれもく品まくり
めしくせてつかひなとしていと稀んこちにまんこ
なませ給ひて泊かせ給ふかしうに美くろ
き女といふあれなり後にあるつしの君りしもつせに
てゆさわひて六条のぬんへわうしまくまつりて

はゆるふさつゝひしるゝらんしもとゝくとし紀
物ゝおかしてめしはゆるひし人かゝ

三　若紫

あれ春ワかむらさ紀をいふ事むらさのうへの
おさかりしとよ見給ひし所　なんし
手につゝくゝ給しうもみんむらさ紀の
称りしかゝひゝる雅のへのワかくさ
とゝ見給ひしゆへにかゝりワかむらさ紀といワかゝ
おされきんかゝ見されハなんし御ゝまくの茂つか
の文をおさなくゝ見ふようけていうおしさゝか
せ屋るゝなくゝ人のうしとゝ出給ふるも我は

はんやなくさむくおしふひしゆへなりなしひそ
にあらぬ世中もうらめしくおかしめしとふは紫
の上ハは茂つか母はゆめいあくおもしませもさう
なく母させ給ひしゆへに物のゆりとハむらさ
の草れゆりなといふ事なれハよそへてよミ給
ひしゆへは春とはワかむらさ紀とうけ見ことさう
は春おりしろく紀りそりとくこそ武鉄の君
きむらさ志さふとは付させ給へりさても此れ
君とは論んし初くなり紀世のともとなりこの
人ゆへ雲うくれ給ひしことハなんし十七の御
としワらハ屋ミとして小山にこうと紀ひし日

屋下のどり　だと給く　なんしに小山
ひき給ひしとりもだとろくとなり　ふくさんと
まれちゝ紀　だきなきゝのてすさひ

是ハ小山ふくの事なりとなり

此むしゝ所さのうへハせんてひのはこの兵部卿のこや
のはむしとめ友つかのきゝ所紀ふ所はめいなりしに小山
も小山りだもしゝ所さのうへのうもれはむ
とめなりだされきよりはもふ所はとくれてかの
うもきゝ見なそうくそくれてだくしまし久なり
扨この姫きこのうゝ給くしきはうちとのそこさて
いふしてうあれを紀そまてまつりてワクはまゝ

かしつきたてゝかの給ふ見ふも見そまてまつんとだ
かしめしてかのそうつふとひたてまつりをふうも君
ともいひよ也なとしてはゐよその年の九月の比
うも君りとくれて家の殿よかまうなりも處
ゐふくだもし處とととりそまくまつゝせ給ひ
て二家のゐんのふしはそまいよりしたてまつりも
てかしかしつき給ふ姫き見十のはとしかりの
ほうハ屋こして小山へだもしませしころハ三月
此月なりさてこそ家の紀ハさうりと紀て　山乃
さつゝハまゝこさかりとはいひそれ又小山よりとめ
とりふことはくふことまれハむしゝ所さのうへまゝ

めの子をかひ給ひしをいねさせいびしまらはなり
しまうりしをむしらはきの上にておしたて才紀
給ひしはとうこのいとうしかりしを源氏
の君は給んしそめくかりかしをといふ事もかり
と人いふことあらふ君かのふを給ふまとく
めの子をかしをなとや気はんとお納言のめれと
いひしかりこ門の一ふ紫上源氏いせ給ふ
敬を源氏也 とうん君ん給へとの給ふ
給ふてくる是は其まくきのむしろ居り水いものな
といふ事是はそうつのもうへ源氏をよひこそま
つりこまふ時くされこむしろもこゑくこそまう
けはらめこゆされそもなりいものとは此志やうしんの

事かりあれかしをいもねとはやうしんの事
なり又きこ居まりし抱かうりといふ事ありこいふ
とをあらふへかしをは心まゆらしり人
く立出くこしろくは給んしるみもいとに
りし給かれは此とこの人こゝしの山なましれ
たけを後ありしの抱かうりをめいしよなれは中
いこしそもりこそ時ありしれ上の此てこともきこそめ
給ひしそうし又むしらはきの上二条のぬんへむ人
そもまひしあしく日いろのきねをきこまつり也
いふ事のありあれは九月は此うれ君をとられ
て十月はかんしれとゆたくまつり給へはいま

たはふれのゆふべの中なれともおもしろやさしきわかき
もろ月ゆふのこゑとこせみもくまりなりけると
たかゆきれとゐひしなりとりかりかゝてはんさう
なりしぬるかくて心んし五十三年むて行さのうへ
四十五ろくかくれ七十深き忘くれ(ども)はなしも
このかけさゆ今かり忘くれことはさんせいの事
ありなるの書(まき)よみてしなり

菜摘苑(なつみその) わかむすめのかなしひ

むかし事もあれむ苑というふ事ありけるの君(きみ)と申
うる玖文(や)にかうしましてう勝頼ひしはれとり
姫君(ひめここ)一人のこりてかうしきりとりすりけるはま
めふくかりめともしいかひそうらんしやすけくへきせ
いふてゆりしくかりめして行(たな)そてまつりのかひ
ありうりえんしの涙かれとかねのみやうぬさく内
まつ心はかりもむくしくありかまか人な
きてみうしえてみせきそてまつりいとかりまの
かうかおりしけるかそしそりこの涙うう文(ばう)なく
それみうく行さわるくさうしのこくおかかりそう
かんそめたてまつりかんしくやしくかかしそれとも
むはむくるを救なしてハきられりみ名てもくま
つうんしあまれあかかさるく人のはかりいひとてかう
きつるそうくかかりて後(のち)よハろしくのうとまいまて

二葉のねんひうしのさいはしませやそのふなんし
なつかしき夏とをなしかなかこの
しき忍つむそれをそてよふれなん
こゝ見給ひしかなとくれなけ ハ花のしを忍あり紅
物なりしを忍をはしてとるれ里にゆへはしを忍はむ
いふにきゝ見さむきおりよハはかりよあり紀このこと
つきかるしとにふれくおりしきかんきぬき
たる人見なりしに君をんかておりひてあつひの上の
あふのこうの中ねもんかけて源氏のおりしはしを
見あしハさんとくあとよはきくゆさてはぬよ見わ
あしたしこそのうさは源氏の中そてをひかへてこうの中ね

も語ともふ大内山ハいてはまを
いるかゝ見せぬいさよひの月
二月十六日の事なりに姫君きんのことをひき給
ひしかなもおまそるのらきまひ人長のいさよ
ひもあともよあし大内山ハはくへしかんきねを忍はし
む花よはくへしこうの中ねよハはことなしを忍
はむ母は見をとりしてくやしき取うをはくへし
宮　紅葉賀
はまもみちのかといふこと桐つかの門そのこゝろ
のゐむのはうをはとめをふよこゝろハ十月なれハ紅葉
をもてなしあくはうありさてもみちのしいふ

みまちぬるにはけくあれとはみき
こありしなりかゝ人の神ゐることはさう面う
きひれ久しやうゐのまひをまそへ久るにや
物は是なり菱つかの御そうにの御子うまれかふ
あれは西ことは久んしの御子母くおそしくれた
御門あれとは志給しめさはみそくひかきはお
はしまくみなりてさうくうに立かふ十一まで
御位なり即世給ふ御治世十八年なりあれそ冷
泉院と申ゆこのことも
かそしこ
あれ世の中
はゆけさ西さ
はしむきへる頼り

是は此是に此はとく紅葉なと母は付へかす
此是にはなることとなれは志るを又此是に久
うちの女房久んなりしのもけとひくこゝろ
年又十七八の人なり久んしは十九になり給
ふれ女房なりしたりふれかふことも
おやのおや　わふさ
ひそれ称　此なりしひとひく　菊のかまこ
わつまやうたふ　うんめいてん是ホ
ひそゆふ立
もしまれそるなこ中に内侍とこゝろのおそ
西をゆとのくさ西をくんしそもそも見えくあ

はまやうこひくうそふさかふにはかん問侍の
しけひは上手ゆゑかひしへて取ひしに亜
さしよりは語ひて物いひかりしかふ扱うちのうさは
かつりくしもてくしれを出給んしてまゐるも
語ふ問侍のもとによるおもしそもる所とうの中
ねさわひてかんしの君をそらおもしそのちま
てのもしひくさとしさりしなり此事にあるを
なれはしるもと紅葉にはけへかしも

又　花宴

此事もれのあんといふ事はかの紅葉の賀此
つさのとしの春大内にし花見あり南殿の橘

さうりふ花のもとゆゑくはわそひあり髭を語も
て元そもち公卿殿上人ちけまいくるまゝく詩
を作り語ふ中ゆもかんしの出こしとのとうの
中ねは春のうくひしさへ語るといふ髭を語も
里しなりこ後去年のもみちのうのまひをお
かしめしさせ語ひてそのころとうくしは来雀
院なりかんしゆはわふせちにせめさせ語へは
けんしもそもちくまひかふとうの中ねたちて
里うくはあんとまひしかりしろさふはそろけ
かふ是後代のまいとかゆゑへしといひわつりさ
まこも後のこれたりしをとくいふ事あるへし花

しに出すゆふ御くしの打なまくなりて見くさせて
まゝ人はおもふ御もうせよときと世語ひてむらに
きの上の御くしを源氏そうせまふかりのまろりおうと
そ紀といふことをはあれと心えへし御くしそ
きまてく子弱といはひて御前なんしまゝまふ
もかりな紀子弱のうこのみるふきの
おひゆくも思はわまのゝそ見んん
とし見ん語ふ此みるすむらに
子ひろともいうくうちらんさるめなく
みちひろ志かのれとけかしぬま
とし見ん語ひしなりあれらのこさ四月かりの祭と

も見んあまとゝいひしか願うれ御うさなとゝひ
きわもせくこともうしそへて御くへし御う
はとうしかのわふひのうへ月日かさなりて御
産ちくなりみやもとゝろのふり紀御うし見ん
まもなわくなろうなりんやれなやゝ大事まそ
かさ里のさ海なれもさ海くれいのりかちなひ
願うへしそのおりみやもとゝろなのりいつ見
このわふひのうへの御うさ母も志海をさきなるま
なしの書みやもと所の御そうしふくしきしこそ
れそろしかりなれさてとうくしてゆきゝ生れ
たまふこのかとの御あらしふかきりなく

付給ふべし四十九日も此くワリ申と此二てうの
ゐんへかへりまふ此年十二月もいまゝにいとけなり
し此程よりそうしすゝれ是給ひしにふのうかれ
給へたなふゆへよりれ大臣の御りとよまゝまふ君
きなれハワリ君を此とのよとゝめたてまつりて
ワリとのへかへり給ふ新しのわれさいたんこそ
なれ十月の事なれハ時雨ふりわまてくハ海さし
此なまゝこともよりまをおかいかをとしめたてまつり
て日ころ宮ゆへなれし女房なとんにさめ屋
も神をしかる源氏の君もかゝしきかくに此ゐ
ありかなしくにかしかしかくかへ思

給ひくむしにさの上此此ゝへワリまふ志もしの程
にいみしくさうまに祿ひとのひてうはくしく見
もしくかしし此むしにさの上十れとしよりて
そゝて給ひしうともいまゝにされくにもし海を
上この姫君もなんしのワリ抱とにかしみるとに
ゆめくにはしもよしてもくにかとにそのにさし
壱十文ある程むしにさの上に新枕ありて此き
の程なんしに此ふしまれ三月をめしての給ふ
事ありしよひハゐれこのいたひなまとあもとの程か
屋しのもちいかもくよありて志てゝめて来ませよ
とにかせはくあれこうけ給ありて祿のこいいく

三ヶ一

みれよのもちの

孫のこ

出れらはちさ里をそめしまを　小井まろう

ふ多よ清くへし

ぼう清さの上れとし十五のこゝろ十月なんし廿二

のれとしなるをよくくんえへし

七　榊

ぼ豊清り紀といふ事は斎ふ六条の交と云

神り紀は志るしのもと紀も本紀ものを

いかにまりへさくおれるさり紀を

ふ和ふひの上れ豊ゆくまる六条の交と云

ぼれをもめのさいくしふ以後へ下里をふふまつきよ

まりしてのこ交にもとまふ西へさとりおりと

積もまてもとう紀なりしいせまてかりをふ

なこ里もおしくおりしてころは九月七日八日

の夕月秋もれ屋りよさし出くよろ川抱

あれ出くおほしめし出くおしろのく

紀ものの志のひやなるふうちや清きまるさ海

志くかの聖れ交へなんし氣り語ひとく

出論んしなれはぬ卯しめ紀をまるさ志れり紀

を大り紀にしてもろ末のとり井りこさひ

てあさちり原もかれくに映しなきなる

杖(イ)松風(まつ)あしたくはしのこゑも雨かひ来る
ものをとゝまゝ〳〵ゆゑてひこさやまゐ
りしかゝ人をこゝまゐるかし紀もせしむこま
ものおりしさ人のしたくさそおりひのこ
し事なくおもしんとゝまゝ志ひ
屋りしかゝ也わもれまそこの程のこゝまゝを
まれなりしかしくおかして此まへの排(さうさ)
といさゝかおしせ給ひてみしのうちへさしい
まゝく物ゝりなとしかふおりの所そりしそ
のゆへにあり紀の事といふさゝ雨くの酒かゝ
也わかりさをくなりしかゝ也ふまゝ云家

杖の葉かれく
ゆふ雨くよ
色彩木の高麗
松(まつ)はし
わかりされかれ

いせまゝく
是(これ)ハのゝ交(こや)いせなとふ付(つく)へしいかも嶺(にし)のそう
物うし紀事わかねまかれの心祢といせよこまそへて付(つく)
為し掛院(かれ)の所なやこ神(かみ)無月に成(なり)てハいとをりく
ひ是(まさ)に所門(ミかと)十一月にかゝれさせ給ふ是(そのころ)ひより源氏(ゆかさ)
を事に入れて物うくおかしめして言(ゆ)につゝ夜の

杖の葉
志もり紀
脇(の)れ交(こや)
わさちりも雨
風そせのかゝ
しくかり八十瀬(やそせ)の波

内ゆくもぬつましく成ゆきて内侍のうこのことを
此事にわらはれて後にはとさへ云れ申しかしやうに事
にあまきをそいせなとにはかへりしを桐つかの御門
いつまこの事に崩御なりしかるに屋らんなと人のた
ちのんにしたらんにはけなれハ事しなり

八　花散里

此事をれちるさせくいふ事
たちをれのかをなつかしほとくき頃
をれちるさせをたつのくそさふ
といふ所のゆへになりかんしかし門のわらへ志
のひてたちしましにはなりて出給ししたりなり

ごとろわりなる扨この所をよきて入給ひしなり
そのことも
又月夜の雲にかくてふよ
をちをれ
屋とれかき祿
あれらはみかくしたそれのころなれハほやく
き頃にもたちをれにもはへし

九　須戸

あれハかんしの御わかに来雀院にくらぬの時をか
のえんにわひそめしにかろ月よの内侍のうこの
ことに御門のさしも明めり後にふなりしのうこを
かんしをとりしのふとせてうちの御をくさ

志ましきいふことはおりし海もさしろ此山にまゐ河
そうりをかふそとたつひ給へも志ましといふ掬
おくふるそうりかゝりとは論んしなれもめつら
かにおかしめして

山ろの人ほりふかける志もくも
ことくいこなんあふるさせ人

こゝませまふりしか屋くそかふりふ海ふなとうつ
事させまふへし屋うくなり屋のこゝろまな條
あれそも海にかゝり屋といふこともなりんうへに
かやうにとゝもしつめて京へ出給ひを志くてゝ
のかせまふどこゝろくれ遊事見まふ母もいかも

かりは出なきてもよかし
はくしかし扨秋母もかりぬさせそに秋ハあ
う紀夕くれにんをも海もたひ孫のここおりい
屋らんさかし房かしてそれにこれぬひとり
孫のよもものあしをさてしかも波あてりとに立
くるあちを紆平の中納言の世きふ紀こゆるや
よ見なんもおかしめしあはせてかまゝ行ひ
おほく孫とも枕うくはりや也京都より持給ひ
しこさんをいきよせて出んのまゝにいきこもま
しまふ口まなりもこゝおもしろくおかしてそ
のかとのことも

ともちとり　月のかか
孫さめれどこ　よそのわりし
うらかなん　うちく紀かなと

かみさふうく拙

あれらはみかは海のうち紀は海井のし紀かなと
いかもは海よは都をちひしのふ世ひうち紀か
かまちしかせくいふことを作くべし拙もさう紀乃
豊に世へくてり給ひし文はどころよりがくさく
かんしのおもし海は紀とふひふ紀はうひあり
あれそ世よりものは紀ひ
いせしまやあかひのうこふあさりとても

いふひかな紀はワ分かなりとり
うち紀めう紀世おのわさをおりひ海まし
りしかかるてふは海のうちまて
久なとこそは海のうちよなへて人のいやすかなりこそ
まし紀かねかるる文　文は不はまん文所まて見くなり
いせし海　おりひ海まし　文六枝まて　まみちの
あかひのうち　ゆふひかさワ分
うち紀めかる　世おのわさ

あれは文は和の文わりし　所のことはなりがく
てその年もくれぬつさのとしの長のころか
くれ給ひしわつひの上れわふのとしの中ねの

なんしまを海へうけされ給ひしこゝはわさゆふ蘇
かなしきてかゝ給ふれそしつまをもしらせとふ記つ
みよあらるとくもいくせんとおりひてしのひてお
もしてしよとまゐて詩まんぐ所よしのふ和
ぬれはなくかゝりのふなんしなつしくめ
けしかきて此ゝ見とてくろこ海ふ忘なとこそ
まつりのふその種のことも

おなしあふこ
ら縁こ海ふ忘
それのさうけさ

雲井よひとゝ
なしこそくく

しれらはとうの甲羽のおもしろときの事なり
なつしく丸名抜めつしさふとゝめうしる
あふこのふせひけくへしわもれふわりうきん
さし母はしれを戸なりかくてこ年三月一日ミ
の日れはもしへし給ちんとくなんし海けしへ
出こまふ母はかふ夏風ふひとくう見の面はふもと海
をもりそるこしその種のことも

ひちかさ面
見の日れもしへ
人ゝ
大海原

さて屋うくとしてそもひの此西へかゝり
給ひそもれはな紙も夏風屋きしをかこなりひら
めさけりをそろしさ事かさゝなし日数を

為くゝれハみやこよりも志よくれハつゝひもゝ事
里ゝりぬまそなちてくゝれ所ゝひまとくいふ
事ゝ為へし此所ゝひわりしの書ハ見ゝとゝり所
もおなし書まわりこ時ぬ所さの上れ文のはうた

一 う雅風やいりふふくらんおりひ屬る
袖うちぬらしなゝ海か紀ゝろ

とゝ見ゝ語ひしなゝ書ゝ志よくゝ書ゝわりし文の事
なりくしくてかゝ書ゝ所ゝ所ゝ十三日まそ 海
をやこもなくふりて十三日のあり門さおなし海
をとらふふゝなりおちゝ所わさましまといふハ
かさ里れしその時すゝよりしの神を源くさ祿ん

て此ゝれうちふくりんともわりし屬ゝん夏風しつ
まゝて雲も雲とりの夏ゝなゝしかもまゝし
海と語ゝ語ひそゝるふ此夏のつけわりちくこゝん
此てをとりてこのうゝさ里語へとのくまふなゝ
されハゆめといふ事も所くへし

十 明石

此書ゝ源氏須戸ゝりわりしのうしへうゝ所くひ語
へもわりしの書といふへしかの十三日のあろこおさ
のかゝへむひ夏さめくに語んし屬りこれをちい
さき舟ゝのりてあり海のさ紀のあくし志かち
あれをわりしれ入所といふなゝ人のもせ

よりも粟門(かんぬし)にてくんしをよひこそまつりて此
むらひこ母(かな)をそまつる此君(ミミ)ゆめうけたまはり
しめしわきせてさうなくこのうしへうけろひ
くふ入(かしこ)給ひしこまりてかさうりなくこつ
きそまくまつるそのことも

むらひのふね　をひかせ
きいりてうかと　ふれて
うしつてひ　うしつてをち

あれらはわしへりてうけひし事かくて初(ミヤこ)の
此を後ぬ母もことなしをまさせさすらは
後さるまて此屋くほとなるをせんをいたてり
いけの屋り北めもおとなくそりなりふる里の
池(けふ)のおもかけ見ゆるをといふともわり事ハ
よりて此くへしあれは三月なり程なく四月
ふなれはよろもかへの此しやうそくの丁のくひ
らかへしろまてわしためくまはせさかさりて
なしかしつきたてまつる此入(かしこ)給いうしくかしつく
むをめ一人りちそりあれそりむしさ紀の巻(まき)
りけらは屋ミのおり小山(こさ)にて人ミかりいうしは
むをめんなら此ひまおりひこひとりこなせく
此くるは此事なりふ元させ　くしなへて
なしをおりひしつきてるへてなしんむこ

をもとりしとおもふにかのひかるゝんしも海
ふあつこゝろをやすていかゝしてうはあてもとへうつ
し氣しせてむこまとりたてまつらんとおもふんを
もみうしの神のあれとやおもひ給ひゝんとし
ほもこゝよしふ祈(いの)卫やすくさもあるそんしの
此論んしゝんゆめとおもふしやうにかのへ(やうさう)も羨(ゆめ)
をゝくこりわへもはむひを氣しせゝりされ
ともいかゝしてかゝひ出もへさせ此のくを待(まち)ゝる
そへとするけきゝらせしある歌ゝんし勅(ミヤこ)のゝ
二条院(てうのゐん)のむしろ所さの上れ事ゝるもしめりもつく
おかしめしもくおもわれなれは興(きん)をいき給ふ

の道をへかれてこうしゝ志やうのことを持(もち)て氣り
てもくゝ先をそてまつるにもしひさもさひ給
ひてあれは女房(ねうしつ)のひきをくるこそにつかりしゝれこの
給ひしことをあるにしくいひよるたゝへ
此むもめひもしやうのことをとゝひなくひき
ゝれは此ひもおとをひかせそてまつるやとゝ
しをもりしよるもゝんしもゆしくおかしめしく
此ゐまゝなるとかふそのことを

くるゝいろ
うもくゝ見
をちおち

あもと
かをめし屋と
なりへのやと

おしみなきまつ里さうへまとくはをうゑは
来るなんしもてこくわたれは見えしかつく
数のまゐれ母もとともしをやんかし掲ふ
らんと男をうらめしくおほしなり扱わしの
上のはをしは姫君いそきさせ給ふ松風の雲は
京へむかへ来らせしくむらはさの上のは子は
志くとうくうの女御に来りなふわしの中
文とは此は事なりと又わしふとをもかくり
といふ事あれはわしの上をうれそへのす
後井ふりち給へる事をいふ数はおりそ
す雲給ふ見えれ也おりて人の口よりもれ

ぬさ紀よとおりしてむらはさの上のはもへ
おりひしらぬゆめとこそ見えく侍里はまうらな
きはとはをかくりと思ひゆるし給へとのこまひて
此所なり
志かくとは何そなりしかりそめの
見るめはわしのまさひなれとも
ここに見てをくり給ひしなりあれをとをもか
ちりといふなりむらはさのうへ
うらなくもおりひくるう和歌りしを
まつしまはなきは出えし掲そと
此所なりをとれわをせて法をさせ給ふへし

十一漂澪　みをつくし

此事をみをつくしといふ事ハ
かまれらてかにハのことをひかれに
かにみをつくしおりひそめなん
此奇ゆへなりなんし　数へかしうへされて種な
くもせのはくらぬにあらこまゐとかまとより卵の
擅大納言よかり内大臣かなにいみしく
さうへかふ種にまとゐまそうとなりたちかくり
さる表乃はゆめのさせしもさゐくまと
よしの秋のはちうひとおかして秋のころもみ
吉へ来りかふ打ふしかのあらしのはうこもさる

秋ことにおきれくこゝ也はおやいさし立くもみる
しへ来しもるに新しゐもしまそはひいみしき
神母くに来給ふとも志しもしてあらしよりも
まいりさまれハ松原のわくりに車たてはなく
いとしきさゐなれさくれか来りかふそとなに
もに此母さしとめ屋まとしひこともせ給へハ内のお
とく来りまふといはこと人あるもしく数
なるぬ男をおりひてなにハのまとへたるまて
かへらんとするに志のひ屋うに人志しせられも
まいのはしゐものあれこ門は車ちうく来りてう
くゝ節なれハつひあれませくちまさひかふ此

はんそ好(かん)哥(う)は

まひあれはこゝろにたなしかはなる

みをはくしてもわたんこそなりふ

といふ哥の心との語ひしかはにまうもやとて

つゆまよふいまてはちやるはかみ紀(そ)竜はまく

巳出して此車(くるま)の内へ年そまつ日毎くうかえりし

みとうしあふ志るしにあくまそも

先くはしわひぬる家母はふりしか

こゝろ見てかの此家(ふし)りしはかりはされはみとうく

し世のふ事はいふこゝろしめくりわふなふかの

真(ま)をいふことを付へしさて此事にありしのうへは

姫君三月十六日ふうしたてまつり語へは家より

はめれとくこさるそのことも

いものをひさき　いう　斉みる年日はいとあれ

ときそもな紀かけ

あれらはかの姫君(ひめきみ)のうまれ語ひし明(しん)の事也

ふ給へし

関屋(せきや)　みとはくしのなしひ

此事(まのこと)せこやといふ事なんし石山(りやま)へ来りけふは

せきこ山みくむりしうつせこと申くしへのおとこの

いよの介ひそちの國(こうへし)司りしなりて下(くだ)つしかか

かもあして後(のち)家への目るはせきこ山みてわひ語ひしら

かしこうなるゆゑ由ぬりそすゝ給ひしをもとに
よりまうへり給ひて花ちるさせのゆうへ又月なる
里のこちまうりふふさみてれの露ふくまも
きむくしきけ里ふるき家ありしれそひこちの
家とゆとものへ戸すさるもとおかしめしいそく
ひけへなふまゝ給りよ露しけれはゆうさをさ
しけくゆともの人れむきのむちあく露折
ちしひてへなまふそれはあれとあふまはの
菓ともひきのけところくゆくろさせなとし
て二三年ありく二条のゐんひしのそいま
うゆしてふちしくそまうり給ひしなりすへ

てゆふかくなふくちはさしいてまうくこちし
いさきまれかうかし人なりき時のゆ哥そし
なんし

そ川祢くもひれこそとはみちもなく
ふ紀より紀のもしのあ海を
よをさふ母は

むゆ　むち
かさ
ふくろふ　あまくろ面く
さ川祢のすゝこう
なせいふ事もありゆくへしこたまもまこぬ

かりそいせたされ〳〵たてしましかれ此門のみよ
母は源氏の孫のをとりしひまりかふむりしのかふ
ひの上の御ちゝ左大臣(さだいしん)愛せんしやうをもうさせる
まゝかかゝ事も御心のまゝ母くめくかたし
御孫(まこ)の姫君(ひめきミ)おしさてんまさふひかふ左大臣(さだいしん)
愛(ゑの)の御まゝかゝらしれたるのむもめかりミ
をけくしの八月にたかましく母わかせの君と
又かんしのかよひ給ひしかせの文(ミヤ)をとゝろの御
まゝれさいくしに立かひしもおりさせ給ひく
かんしにさいくしをのぶにしてまつりく
内へ立てせ給へもとりくれ御たほしかく

拂つかと申後母はきの紀に立給ふみうとし給
御の御ことゝまゝと母にこのまゝせ給へはまうく
うちわつめ来てせかふにゝろは三月十日ころなれは
大くこのそしくもおりしろさ比ゝきてんと拂つか
とさうをワうち御母わりてみうせ御弟
ありせいゆやうてんのひろひさしに御産しそひ
て内の御うさワうしせかふ母ちの御さいくん
母は女房を三人御く出されかりんことに
さうそきてさふかるく兵部(ひやうしつかさ)の文かんつけの
御こゝろとのたんしかふとらくにいとこしり
ひかりの拂つかなれはかんしの御うさしりまは

わしの二の為をとり出されそりあれよりあひたる
うちのふさく為わるせやいふ此を為わしの二
の為はも為よりおもしまし時たらへな紀出れ
くれわまりに多くのうこようれうしき山のさ
たと為井を此人のゆくくかさもましのふそれ
ふりの此ふさき為をうし紀語へはいくらをろうなら
んたらへんうなしあれをんえく付させ語へ
此此為をハワ物なりしわまりにふひして物へ拘
ちくのかり語ひてもむら此さの上りそにも
ふせてそしまつるも此と紀なしふ出されそりさ
きんむら此さの上の三のうし見とりふ事の一ふ

此とりうりさんえへし一母はわしの上れうえ
の為れ上にうとをかんせ語をぬ事一母はさぬく
もりふわしの上母は志語きぬを思らせら
まし事以上三なり

十三　松風

此事まりうせやいふ事なんしのわし母く
此人さし淺うしを入為のむもめをおかりして
そくなしさり志を此論んしもてくのかり語ひ
を此ひめき見うし見たてまりてこうく月日をさ
て三よなりのふわまり　よさうひ為てて里を
まこれおかにうなく無しくおかして、かのうら

よ里家へのかり給へとの給へも大そしのこと海
井先志もしはむろしとくかのわしの上れ母へ今
の小れかしこのれか井かものつりふしろこしろ
りらされもそのわらりの物とをよひよせて
ふる民家なんと志母里せさ殷てのかりすまふ
やしこちのなとことはひうしふをてくむをめと
はまくのかりすふおうこうは小のうるむをめよ
井をてられ又二三年(祢ん)かりと神(そて)の上のあのやし
ふりてなしかつきなしをそてまつるひめ君(さこ)
母もなれまたてまつりつかしよりこれは
山川のよふかあひ見てまつるへさせなこり

のかなしさたとへもなしされとも都(みやこ)へのかりかへ
めくそくなりふさそれか井よゆきつきこれは
そのあらりなれは川(かは)なとをしく松風(まつかせ)ふき
ちらひてふるさせとしもれはをさひしかれ
無あしとなんし出給ひしれ里都(みやこ)よりかる
せ給ひしをとあふまそのうるしとくとき
すふを知(しり)いてひき給ふ
男をうへくひとりかへれ家古させよ
きてしふにこれ松をせそふく
とよこしゆへなりそのことも
都(みやこ)よりかへるこのこと　まつ風

おか井川

かゝりいふ事をはしへし掛その法源氏のつらに
御堂といふしくたて月に二度念仏なとのみとめにおた
もしかるはゐくに大井へもまゐて世語へは月
二度の御契り此とく也わかしの上はおか井に便
しなり おかのつゐてに源氏みな人のつらにおとむとん
えたり絵にんえ分て付なへ月に二度の契りは
大井のつらに付へし 姫君三にて登なへ申ひる
このこしやまの世大井に付へし又此事に
ふたゝ里をいふ事わりあれは秋のあろかん
しかつ人まゐて語ひてまいのことくおかゐに

おもしかる時ワ此夜上人君にちわまゐ
かりの御ゐくに来りたれはみさをまゐりて
月おりしろきあらかれは春ひかふ
ひしてこ寄ととをときの枝ちけまりとあ
かとうかりしきとさとんはへらもちいさき
木のえてことんえへしあれはうつ聖ゐに付へし

十四 薄雲

此うも雲の女院と申は夜つかの事かやく
日の文と申はかんしのけいが志のひて来りて
まふ事人なり此事うも雲といふ事うも
雲の女院にうたさせ語ひて後かんしまゐ

斉

いり日さしとみ祿りしたるひくうしと雲ハ
物たりふ袖りし気やまうへる
此斉のんハうく屋く日の気とやそし菽つかの
みや それにあ主上ハなんしれ志のひてこの西
ちくふまうけ給ひしみうやなれとも右院
ゆめ母も志り給ひくことの外西ひとおし見
母くはとし十一母くみを清くしの事そう
西ぐらぬふ清うせすふ西母かく屋く日の気も中
気より女院のせんしかうつ世給ひてめてこ
しはとし三十七母くうくれすふころハ三月

の事なるを天下・源園なるを西門をもしめまくく
まりて西歎のいるふしとりけるんしの西心
のうちおりひ屋るへし大くこよのもられさとる
母も西んつくおかしなけうせすふ西んなれも
ましてをとれぬむしの西ん清くしなれハ
とハ此よの名殉そにもなれんらして人めせは
ちくさの事母くはんのうちハおりひ屋るへし
かくさの腔へのさくしんわらも
ことしのもうはとこそめよさけ
なとく苑よひとをかこち給ひくなるめたまふ
なくれのそうさこそうこれくかしとしりてゆふ

はく日のさまとにまうせて寛の雲のうまくゐん
かうやうゐくゐ御袖の気りまうひ給ひよ
見給ひしかりさてこううまと雲の雲と申
此女院なもうまと雲の女院と申つけまうさ
禮もうまと雲とあらはゆゑくまの袖の気かく
屋くひかりかくあくまといふ事をはくへしと此
雲まてんかふさせしまけく日のかしき
雲のくとまゝまてもかしきかる事とも
しほとふ大やけもおかしかけ也給ひく
御祈りとともさ海ゝふありしふ此女院の御を
ち無くおもしほとそうつ天屋けの御 持僧

無く和居まゐり給ひしかんのきゐまふかゝ
かんしの君の御こ無くおもしまと一切の事
おやのとんしまおも屋事なれいおやと志給し
めさて御弟しくさせ給へとそのゆへにおやうと
天下をさやうなしまとと申せ侍れいみかせ天
きまおゝ給きおかしてその気とかんし母も
申されてみてくゐふつき給へとおかせられし
かゝといりさる事侍らんやとしてたりひまに御心乃
うちまハ御心え給て そのうちそ御世も志門戸田
かるその御心のと給りまて此みよにかんし三十
此の御こし故のうしもの事す院号かうしかせ

語ひて六てうしのかんと称しまかそれ

一　又　擢（わきさうか）

ぶるをわきさうかさりし事ゑんしの出所ふわきさうか
のさたかんさて式部の文に聞書かれの門
きあくれむしうおわりのさせ語ひしせんさいか
のんしやしかのれうさへの出所
みしおりの露わとしれわわきさうかの
まれのさうかとはよそやしねうん
さしかんてみちくきり門口しゆへふわきさうかの事
さりふかかしさいかしかりの門さあしたちしまう
きうのいそれのうらしまとくもはなりしけしやしか

まは世語へとも叔しれ此情しさはあるかを
もあくかしもとやくさせ語へしも此かふ出ん流
まくてやさまのふおわりぬふなかまくはれ叔さのり
そみて文ふ一とろまますふなかしそのことを
わさうか　　　　りしそれ
なやさいふ事まつけへしはゑうよ此ゆへよおや
みくしやゑんし事のふよおわりさうか語のし
かとくもれんつまくてのうふ流丹よはくしたまう
まふゑうし此事徳さし此ため一とはくへし